曖昧見舞

谷津矢車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
曖昧見舞

【Ｎコード】
Ｎ０８６４Ｃ

【作者名】
谷津矢車

【あらすじ】
友人のお見舞いに、病院にやってきた「僕」。その病院で「僕」は不思議な出来事に遭遇する。「僕」の出会った、その不思議な出来事とは。

【1】

「あれ。あいつの病室って、何処だったかな？」
生まれつきの方向音痴とフルーツバスケットを両手に抱え、だたっ広い病院を僕は右往左往している。
昔からそうだけども、この病院はどうも広いし、不案内だ。開院以来増築に増築を重ねたせいでまるで迷路のような構造になっている。
また院内も、そこはかとなく薄暗く辛気臭い。しかも薬品や消毒薬のニオイが混じりあって、不思議な気分にさせる。
・・・・方向感覚が狂うのも当たり前だよな。
僕は、迷っている原因を、病院の構造及び薬品類のニオイのせいにした。
僕は、大学の学生である。大学生、というと一般のイメージは概ね「大学生なんて暇なもんでしょ？」みたいなものだが、まさしくその通り、暇。すごい暇。
あまりに暇なもんで、サークルとバイトで暇つぶしをしている、典型的な文系学生だ。
文系学生は就職が大変らしいが、でもこうやってモラトリアムを充分すぎるほど楽しめるんだから、これはこれでアリだ。
僕は、モラトリアムの暇つぶしに、大学の軽音楽サークルに入っている。
本当は野球とかサッカーとかいったスポーツ系のサークルに入りたかったんだけど、主治医に“慎重な意見”を出されてその気持ちも萎えてしまった。かといってサークルをやらないのも癪なので、体の負担が比較的少ない軽音楽サークルに入ったのだった。
今日この病院に来たのは、そのサークルでつるんでる友達が入院してるからだ。しかも、僕のせいで怪我をして。

その友人、マサトと僕は、大学1年からバンド「マサトとマサトを抑える仲間たち」を組んでいる。このバンド名からお分かりの通り、マサトはライブ中になると人が変わるようにスパークしまくる癖があり、それを抑えるのが他メンバーの義務なのだ。だが、その義務を、僕はあの時すっかり忘れてしまっていた。ああ、ごめん、マサト。

話は、一週間程前に遡る。

僕ら「マサトとマサトを抑える仲間たち」は、初のワンマンライブを執り行った。しかも、池袋のライブハウスで。

当然、僕ら「仲間たち」は沸き立った。初のワンマンライブ！夢のワンマンライブ！

だからチケットもガンガン売りさばいたし、練習にも余念が無かった。とにかく、みんな浮き足立ってたんだ。

だが、僕ら以上に浮き足立っていたヤツがいたのだ。それが、他でもない、マサトだったのだ。

マサトの浮き足立ちぶりは、今にして思えば尋常じゃなかった。

三日前には客とのタッチの練習に余念が無かったし、二日前には客をアオる練習を、1日前にはダイブの反復練習をしていた。

おいおい、楽器の練習をしろよと突っ込むべきだったが（マサトはボーカルとギター担当だったのだ）、僕ら他メンバーは僕らで、ワンマンライブの際に書かされるだろうサインの練習をしてたわけだから似たり寄ったりだったのではあるが。

そして、ついに本番の日がやってきた。

いやあ、ライブの神様っているんですね。

本当にすごかった（マサトが）。とびはね、客をアオり、タッチ！その合間に歌い、叫び、弾く！

客もすごい良質で、みんなノリにノっていた。ステージと客が一体になった、すごいステージだった。

そんなライブに、僕らは明らかに正気を失っていた。

さらに言えば、正気を一番失っていたのは、やはりマサトだった。アイツ、自分のギターを破壊し、燃やしだした（ヤツ曰く、ジ●へ●のオマージュらしい）。そしてさらに飛び跳ね、暴れる。お前は新人リアクション芸人か何かか！と突っ込むのが普段の僕らの務めだったが、会場の雰囲気に飲まれた僕ら他メンバーは、すっかりヤツを抑えるのを忘れ、エキサイトしていた。

そして、アイツは客の波にダイブをした。

よくライブ映像なんかでボーカルが客席にダイブして、客がそれを受け止める光景があるが、あれは熱狂的な客あって成立する光景なのである。っていうか、カルト的な人気を誇るバンドのライブでしか見れない光景なのである。つまり何が言いたいかというと、僕らアマチュアに毛が生えた、つうかアマチュアでしかないバンドでは決してありえない光景なのだ。

それはマサトにも分かっていただろうが、その日の客はノリノリだったし、「もしかしたら受け止めてくれるかも」っていう甘い期待のようなものがあった。

だからこそ、アイツは挑戦したのだ。まるで、太陽に挑んだイカロスのように。

あそこで、アイツを止めるべきだったのだ。いつものように「止めておけ」って。あのとき、アイツに一番近い位置にいたのはベースを弾いてた僕だった。だから、僕がヤツを止めるべきだったんだ。

結果から言おう。マサトは全治2ヶ月の大怪我。

客は、マサトを受け止めてくれなかった。あのときの光景、忘れられない。客の波が、まるでモーゼが海を割ったように、マサトの落下予想地点を中心に割れていく様を。

そして、太陽に挑んだイカロスよろしく、ステージから失墜した、というわけだ。

・・・あの時マサトを止められなかった負い目もあって、わざわざ電車で一時間もかけて、ヤツが入院する病院に見舞いに来たわけだ。

長い廊下を歩きながら、一週間前の「惨事」を思い出して、僕はプッっと噴き出す。
にしても、この病院、こんなに大きかったかな？
きょろきょろと見渡しながら、僕は考える。
確かに昔からこの病院は大きかった。それに迷路みたいに入り組んだ廊下も健在だ。以前と比べて増築してるから、広くなっているのは当然だが、まさか1時間も迷うほど大きいはずは無いだろう。
薄暗い廊下を歩きながら、僕は両腕で抱えた重いフルーツバスケットを眺める。
これは、母親が僕に持たせたものだ。
「あなただって、昔貰ったときは嬉しかったでしょ？」とかなんとか言って。
どうだったかな、貰って、嬉しかった、かな？あんまり覚えていない。
ふう。
ため息を一つついてフルーツバスケットから視線を逸らした僕は、あることに気づいた。廊下の奥の方が輝いているのだ。
陽光かな？
薄暗い廊下をずっと歩いていた僕にとって、その光はまぶしくすら感じた。だけど、おかしいな？今日曇ってたんだけどなあ。と、今日の天気をふと思いやる。
ん？僕は、気づいた。
その光が、どんどん薄暗い廊下を侵食してゆくのを。
決してまぶしくは無い。でも、圧倒的な強さをほこる、不思議な光がまるで満ち潮のように、どんどん廊下を侵食していく。なんだろう、この感じ。暖かいような感じ？幸せな感じ？
いや、むしろ・・・・・・
懐かしい。これだ。
その、何か懐かしい光が、僕の体全体を侵食し、包んでいった。
ああ、なんだろう、この光は。

光の粒たちが僕の網膜を焼き、視界を真っ白にしていく。
ああ、まっしろだなあ。
僕は、ただただそう思った。

【2】

ようやく、目が光に慣れてきた。
圧倒的な光にかき消されていた景色の輪郭たちが、ようやく自己主張を始めるかのように、うっすらと僕の目に飛び込んできた。
何だ、廊下じゃないか。
考えてみれば当たり前のことだ。「陽光に目がくらんで、目が慣れた途端にヴェニスにいた」なんてことがあったら、航空会社は軒並み倒産するだろう。でも、さっき僕を包んだ光には、ロマンチストなんて柄じゃない僕をして何か不可思議なことが起こるんじゃないかという予感を感じさせる、そんな説得力のようなものがあった。具体的には、僕をどこか不可思議なところに運んでくれるんじゃなかろうか、みたいな、そんな空想じみた予感。だから、目が慣れた瞬間、いささか拍子抜けした思いがしたのだ。
だけど。なんだろう、今までの廊下とは違う。確かに、廊下を形作る輪郭はさっきまでのそれだ。だけど、何かが違う。あの薄暗い廊下とは。
そうだ、明るいんだ。さっきまでは灰色で薄暗かった廊下が、今は、オレンジかかった光が全体に充満しているような、明るい廊下に変貌している。・・・・いや、明るくは無い。むしろ、影というものがまったくない、と言ったほうが正しいか。周りを見渡しても、足元を見ても、影というものが全く無い。
さらに言うなら、まるで壁や床にリアリティがない。まるで、そこに存在しないんじゃないかってくらい、ぞんざいな存在感しか感じることが出来ない。
なんだ、これ。寝ぼけてるのかな？それとも・・・・・？
「あ～、寝ぼけてないぞ？」
後ろから不意に声がしたので、僕は半ば反射的に振り返った。

「よう」
後ろに立っていたのは、怪物だった。
ワニみたいな口をガチガチいわせ、羊のそれによく似た足を持ち、鷹の爪みたいな腕を持つ、だいたい大型犬くらいの大きさで、二足歩行の「怪物」。そんな怪物のくせに、一丁前に燕尾服なんぞを着ている。目から口から粘液を定期的に吐き出してはいるが、壁や床と同様にリアリティが実感としてないので、あまり怖くはないし、気持ち悪くも無い。
「な、なんだよ、お前・・・」
僕は、ちょっとタジろきつつも、その怪物に話しかけた。
「ああ、ワシか？ワシは、ウツセミ。」
粘液をよだれのように吐き出しながら、その怪物は答えた。意外にも、その声は、澄んだ、老成したものだった。こんな姿の怪物だったら、もっとおぞましい声でも良いだろうに、と僕は思った。
「・・・お前、一体・・・」
「あ？だからウツセミだと言ってるだろうに。」
しばし、沈黙。口火を切ったのは僕。
「ここって、病院だよな？」
「・・・う～ん、ここは、病院。だが・・・・・・」
「だが？」
僕の問いに、ウツセミは猛禽類の爪のような手を僕の目の前にかざし、チッチッチ、と指を振りながら答えた。
「ここは、お前の知っている病院ではないのだ」
・・・・は？禅問答じゃあるまいし、「お前の知ってる病院であってお前の知ってる病院ではない」って、どういう意味だよ。意味わかんねえ。頭の中で「？（ハテナマーク）」がぐるぐると渦巻く。
「ふう、すぐ“意味がわからねえ”と投げるのはよくないねえ。分からなくても必死に考えるのが大事なんだよ」諭すような口調の怪物。
・・・・うるせえやつだ、化け物のくせに。と、僕は心の中で毒

づいた。
「化け物ではない。ウツセミと言ってるだろうに」ウツセミは、アゴをガチガチいわせて僕に反論した。
あれ、おかしくないか？
ここまで「会話」して、ようやく気づいた。僕は、さっきから声を発していない。ただ、頭の中で考えているだけだ。・・・・・ってことは、こいつ・・・・、
「お察しの通り、ワシは人の心が読めるのだ」
「えええええええええ！！」
この化け物が僕の目の前に現れたときのインパクトより、「この化け物が心が読める」というインパクトのほうが大きい、という、傍からみたらどう考えてもズレてるだろう僕は、大声で叫んだ。
ななななな、なんで人の心が読めるのさ！！ていうか、なにアゴをガチガいわせてるのさ！！おにいさん泣いちゃうよ？！ウワ～ン！！！
一方のウツセミは、そんな僕を持て余したようで、ため息を一つつく。
「あのなあ、心が読めることがそんなに衝撃的か？お前たちが心を読めないだけで、「心が読める」くらいの芸当、ワシらにとっては当然のことだ。・・・に、しても、お前、随分混乱しておるな。しょうがない、種明かしをしよう。
この空間はな、この病院の時空を歪めて作った、言わばワシの家なのだ。だから、お前たち人間には見えないし、入ることもできない」
さっぱり意味がわからないが、ここが「人間には見えないし、入ることも出来ない」空間だということはわかった。
ん？じゃあどうして・・・・。またもや僕の頭の中に「？（ハテナマーク）」が踊る。
「じゃあどうして、僕はここにいるんだ？ここは、人間が「入ることが出来ない」んじゃないのかよ！」

ようやく平静を取り戻した僕がそう叫ぶと、ウツセミはワニのように裂けた口を、いびつな形に歪めた。でも、その表情が、どんな感情を現したものなのかは見当もつかなかった。

「ん？ああ？この空間にはワシしかいないもんでな。暇で暇でしょうがないのだ。ちょっとお前たちにワシの暇つぶしをお願いしようかと。」

「ひ？暇つぶし？それに、『お前たち』ってことは、僕のほかにも誰かこの空間にいるのか？」

「うむ、ただの暇つぶし。実はな、一週間前にこの空間に迷い込んだまま居ついてしまった子供がいてな。そいつとお前とで、かくれんぼをしてもらう。それを眺めるのが、ワシの暇つぶしだ」

「か？かくれんぼ？」

「ああ。だが、大変だぞ？」ウツセミは言った。「この世界は、この病院の時空を歪めて作った空間。つまりは、いろんな時代の病院の、いろんな空間をくっつけてるからなあ、結構広いぞ？」

ん？どういう意味だ？と僕は頭の中で考えるが、よく意味が分からない。それに、と前置きして、ウツセミは続ける（僕の疑問には答えずに）。

「その子を捕まえて、元の世界に返さぬことには、お前を帰すわけにはイカンぞ」

「え！？な、なんで！？」

「あ？理由？そんなものどうでもよかろう？大事なのは、『お前は、自分の任務を全うしないことには元の世界に帰れない』ということ、ただその一点だ」

「ぐ、ぐむ・・・・」

こんな化け物の暇つぶしに僕が使われるとは・・・・無念。でもどうやら、納得するしかないらしい。ここは、僕の住んでいる世界では無さそうだ。つまり僕に、逃げ場はないのだ。このウツセミの暇つぶしに付き合わないことには、この世界から出る方法も見つかるまい。でも、納得できようはずも無い。

「ほれ、さっさと始めるとするかね」
こう言うと、ウツセミはアオーンと犬のように一吼えした。すると、目の前に、扉が現れた。
「ここをくぐったら、かくれんぼ、スタートだよ」
やけにリアリティのある扉だ。僕の隣にいるはずのウツセミより、はるかに存在感、リアリティを感じる。
「あ～そうそう」
ウツセミは思い出した、というような顔をして、「その、フルーツバスケットは持ってった方がいいよ」と、僕が両手で抱えるバスケットを指した。
「な、なんで？」
「・・・きっと役に立つ」ウツセミは穏やかに言った。
「あ！ああ・・・」
僕は、「フルーツバスケット重いからここに置いてっちゃおうかな～、かくれんぼには邪魔だし」と考えてたから、ちょっとどきっとしつつも、バスケットの縁をぎゅっと強く抱えた。
「んじゃ、頼んだよ」とウツセミがぽつりと言うと、目の前の扉が開いた。
「・・・・・・・・・・・・うん、じゃあ、行ってくる」
不承不承ながら、僕は扉の奥に向って走っていった。
重い、フルーツバスケットを抱えて。

【3】

やけにリアリティのある扉を駆け抜けた先には、木造の廊下が続いていた。

木造の廊下は例によって存在感があやふやで、やはり影が無い。
ふと窓の外を眺めても、光に溢れているだけで外の景色は見えない。
まったく存在感の無い空間だ。

この空間のどこかに、僕が捕まえるべき、子供が隠れている。

早く、見つけないと。

僕は、誰もいない木造廊下を、一人でつかつかと歩く。

『おい、早く探さんといつまでたっても見つからんぞ』
不意に、僕の後ろから声がした。僕は、歩みを止めず、振り向かずに答える。

「わかってるよ。でもさあ、別に僕にはその子供を捕まえる理由はないんだから、やる気なんかおきないよ」

『はっは、まあそう言うな。・・・・でもな、お前には、その子供を捕まえる理由があるよ』

「理由？ああ、その子供を捕まえないことには、僕を帰してくれないんだろ？」

『あ、いや、それもあるが。・・・まあいい。とにかくちゃっちゃか探せ！』

ここまで会話して気づいた。

あれ？今、僕は一人で歩いているはず。前にも後ろにも誰もいない。と、いうことは・・・・・・

「ぎゃあーーー、おばけ～～～～！！」僕は叫んだ。

『お化けではない！！いいかげんに学習せんか！ワシだ。ウツセミだ。』

「ああ、何だ、ウツセミか。お前、何処にいるの？」

『今か？お前と出会ったところ、ワシが“玄関”と呼ぶところにおるよ？』

あ、あそこ、玄関って言うんだ、へえ。

「で、何で、その“玄関”とやらにいるはずの、お前の声が聞こえるの？」

『ん？この空間はワシの作った空間だぞ。声を送るくらい造作も無いわ』

「ああ、なるほど。」

僕は、手をポン、とたたいた。全然、なるほどじゃないけど。
だって、おかしいでしょ？この理屈じゃあ「大工さんは、己の作った建物内ではテレパシーを使う事が出来るようになる」ってことになる。
すっかり、この不思議空間にアテられて、脳みそが麻痺してる僕であった。

「で、さぁ」

『ん？なんだ？』

「ここは一体何なんだ？」

『あ？ここはワシの住む空間、家だよ』

「じゃなっくって！確かウツセミ、さっき「この空間は、病院の時空を歪めたりくっつけたりして」作った、って言ってたよな？
ってことは、この空間は、病院の色んな時代の色んな空間を「歪めたりくっつけたり」した、ってことだよな？
じゃあ、この空間は、いつの時代の病院なんだ？」

『ああ、ここは、お前が生きる時代から６０年前、病院開設当時の空間をベースにしておるよ』

「ふ～ん」

道理で古めかしい造りなわけだよ。そんなことを漫然と考えながら、オレンジがかった、田舎の木造校舎を彷彿とさせる廊下を歩く。

「なあ？ウツセミ。質問、もう一ついい？」

『なんだ？』

「僕が捕まえなきゃなんない子供って、どこにいるのさ？」

『それじゃあ、かくれんぼの意味がないだろうが。・・・だが、お前の思うままに歩いてみろ。そうすれば、見つかるよ』

「むむむ・・・・・あれ？？？」

ウツセミとの会話に夢中になってるうちに、周りの景色がまた変わっていた。

さっきまで木造の廊下を歩いていたはずだが、気がつくと、ロビーのような空間になっていた。

黒い机や、長いソファーが、整然と並ぶものの、だれもいないこともあり、がらんとしている。普通、病院のロビーというところは人でごったかえしているから、こんなふうに人っ子一人ない光景というのはちょっと薄ら寒いものがある。

あれ？この景色、見たことがあるぞ？デジャヴ？

ていうか・・・・懐かしい。

『ああ、これはお前の生きている時代から数えて、１０年前のロビーだな』

ウツセミの声が、僕の頭の中で響く。

１０年まえ?ああ、道理で見覚えあるはずだよ。
１０年前は、夜のこのロビーが遊び場だったからなあ。

僕は、ふいに１０年前のことを思い出した。

【4】

「ねえ、あなたの病気は決して治らないわけじゃないの。手術さえすれば、あなたは病院から出れるのよ。だから、決心して。」

母さんの声が、一人病室の中で響く。

「ごめん、母さん。もう少し、考えさせて。」

ボクは、いつものようにそう答える。

「・・・・そう・・・・・わかったわ。でも、約束して。いつかは、手術を受けて？」

「・・・・・・・・・」

母さんは、呆れたようにため息をついた。

僕は、生まれてこのかたずっと病院で生活していた。

僕は、体が弱い赤ん坊だったという。

最初は親たちも、「あら、この子、よく風邪を引く子ねぇ」程度の認識だったらしいが、そのうち、さすがにこれは異常だろう、ということになり、医者に診せに行った。

そうしたら、医者から思いかけず難病宣告を受けた、というわけだ。
それから、僕は病院に入ることになった。毎日点滴やら薬やらを打たなきゃならなかったし、それ以上に、僕の体では、外の環境に耐えられなかったようだ。
「三歳まで命を永らえられれば儲け物」と医者に言わしめた僕の命は、医者が考えたほどには弱くなかったらしい。
結構危ういときもあったらしいけど、なんだかんだで十歳まで生き永らえていた。

「それじゃあ、かあさん、家の仕事があるから、もう帰るね」
母さんは椅子から立ち上がった。
「うん。じゃあね、母さん。」
母さんは呆れたような顔をしながら、ボクの病室をあとにした。
ボクは、ため息をついて、ベッド近くの机の上にある、「特殊相対性理論のすべて」という本を開いた。

わかってるよ、母さん。
ボクがこのまま入院してたら、お金の面でまずいんだよね。
ボクの父さんは、ふつうのサラリーマン。母さんはボクの面倒を見るっていう意味もあって専業主婦。
そんな環境じゃ、ボク一人の入院費用を出すのも、大変でしょ？

だから、手術を受けさせたいんだよね。
そうすれば、手術費用だけ払いさえすれば入院費用が要らなくなるもんね。

と、本に目を通しながら、ボクは心の中でつぶやいた。

今となっては笑い話だが、当時の僕は親にいまひとつ懐いていなかった、と思う。
父さんとは二月に一度程度しか顔を合わさなかったし、よく顔を合わす母さんとさえ、二日に一遍しか会わない。
そんなんじゃ、懐けるはずもない。
そんな子供でも、親たちは僕に愛情を注いでくれてたらしいが、当時の僕はそんなことにも全く気づかなかったらしい。親が、僕の将来を案じて手術を受けさせようとしてたのに、それを逆さコウモリに受け取っていたんだから。

有り体に言えば、僕は不器用な子供だったんだ。
人の気持ちや思いを、相手の意図通りに取れない。それを本から得た小賢しい知識で塗り固める。
僕は、そんな子供だった。

ボクは、本の文字を追うのを止め、病室の壁にかかる時計を眺める。午後8時を指して、コチコチと音を立てている。

そろそろ時間だ。

ボクは、着ているパジャマを新しいものに替えた。今夜のパジャマは、青と白のストライプ柄だ。洗濯したての香りが、暖かくボクを包む。
そして、ボクは靴を履き、向かった。いつもの、遊び場へと。

病院のロビー。
昼間はお医者さんや看護婦さん、お医者さんを待つ患者さんやその付き添いの人たちでごったがえしている印象があるけど、夜になると、その印象が一変する。
診察時間をとうに過ぎたロビーは、お医者さんも看護婦さんも、患者さんもその付き添いも、誰もいない。しかも、電気も非常灯以外は殆ど落ちてるから薄暗い。

ここが、ボクの遊び場。
でも、遊ぶっていっても、大したことはしないし、出来ない。
ソファーのクッションでトランポリンをやったり、少し走り回ったり。その程度が、ボクの遊び。

でも、ボクにとっては、ここが、遊び場なんだ。

いや、それだけじゃない。
ボクにとって、この病院こそがボクの居場所。
母さんは、「手術をうけて、退院すれば家に帰れるのよ？」ってボクに言う。
父さんは、「そうすれば、家族みんなで暮らせるようになるんだよ」ってボクに言う。

でも母さん。その「家」に、ボクの居場所はあるの？

でも父さん。ボクを、「家族」の一員に数えてくれてるの？

ボクは、そんな「あるんだかないんだか分からない居場所」に飛び込む勇気なんてない。

正直、ボクが手術を拒んでるのは、それが理由。

怖いんだ。どこにも居場所がないのが。いや、自分の居場所がどこにも用意されていないことに。

だから、ボク、入院していたいんだ。

そんなことをロビーの長椅子に座って考えていると、不意に、僕の横に、人がいるような気配がした。

こんな時間に人？看護婦さんかな？

そういえば、以前ここで遊んでたのが見つかって雷を落とされたことがあったなあ・・・昔の苦い体験を思い出しながら、ボクは恐る恐る横を向いた。

意外だった。

ボクの横には、（看護婦さんではなく）年のころ２０歳くらいのお兄さんが立っていた。

フルーツバスケットを、大事そうに抱えて。

【5】

『おい、どうしたのだ！！お～い！！』

ウツセミの声が、僕の頭の中で響く。
昔の思い出に浸っていた僕は、ウツセミの声で追憶の世界から引き戻される。

「ああ、ごめん。
なあ、ここに例の子供がいる気がするんだけど・・・・・」

僕が入院していた頃のロビーに、今いる空間はよく似ている。むしろ、寸分違わない。
だから、興味が沸いたのだ。あの懐かしい、僕の遊び場に。

『“興味が沸いた”か・・・。まあ、お前がそう思うのならそうなのだろう。』

ウツセミの言葉を半分くらい聞き流して、僕はそのロビーのような空間を歩く。

しかし、この空間・・・・さっきまでとは何か違う。
さっきまでの空間は、まるで夢の中のそれのように、存在感があやふやだった。
だが、今の空間はしっかりとした存在感がある。
まるで、病院のロビーだけ切り取ってきたみたいに。なんだろう、

これは・・・。

『ああ、この空間は、切り取ってくっつけただけだからなあ』

「どういうこと？」

『いや、普通、新たに空間をくっつけるときには、その空間を歪ませるのだ』

「歪ませる？ああ、影が無かったり、全体に存在感が無かったりするあれね。」

今までの空間のことを思い出しながら、僕は返した。

『ああ、そうだ。

そして歪ませた空間をコピーしてワシの家にくっつけているのだ。』

さっぱり意味が分からない。どういうこと？

『う～む、簡単に言えば、お前たちの空間の姿を、ワシらが他の空間上に写し取って我が家としているわけだ』

わ、わかったようなわからないような・・・・・

『はっはっは、別に分からんでもよい。

それより大事な事は、ここの空間の説明。・・・ここはな、お前たちの世界の空間をそのままつないでおるのだ。』

「そのまま？」

『そう、そのまま。
つまり、この空間は、お前たちの空間でもあり、ワシの空間でもある。共有しておるのだ。』

僕らの空間でもあり、ウツセミの空間でもある？う～ん、わからない・・・・・。
でも・・・つまりは。

「よくはわからないけど、この空間は、僕ら人間もウツセミも使用可能で出入りが自由、ってことだね？」

『そういうことだ。』

僕は、そのロビーをつかつかと歩く。照明の落ちたロビーは人も無く、薄暗い。
僕の足音だけが、ロビー全体に反響している。

懐かしいな。この感じ。
僕の、かつての遊び場。もうここでは遊ばなくなってしまったけれど、しっかりと覚えている。
外の世界に出て、ここでの遊びよりもっと楽しい遊びを知ってからでも、この遊び場のことは忘れられない。

ああ、このソファー。僕がよくトランポリン代わりに使っていたヤツだ。

そのソファーをポンポン叩く。
あの頃は、それこそ僕を天まで届けてくれそうなくらいの反発力があったような気がしたのに、実際はそれほどでもなかったらしい。

せいぜい、僕の体を３０ｃｍくらい跳ねさせていただけだったみたいだ。

ここに、このソファーがあるということは・・・。

僕は、記憶を頼りに、かつて僕がよく座った長椅子を探そうと、あたりを見回した。

僕の、“特等席”を。

あれ？

青と白のしましまが目に入った。

真っ暗なロビーの中では青と白が本当に映える。

よく見ると、青と白のストライプ柄のパジャマだった。いや、正確には、それを着た子供。

長椅子の真ん中に座り、下を向いている。

光が少ない関係でその子供の顔色をうかがい知ることはできないが、なぜか寂しそうに見える。

そういえば、この子供の座る椅子、僕の特等席だ。

そんなことを考えながら、僕は子供の座る長椅子の横に立った。

重い重い、フルーツバスケットを抱えて。

【6】

下を向いていた子供が、僕に気づいたのかゆっくりと顔をこちらに向けた。
最初は、明らかに顔に恐れの色があったが、僕の顔を見るとその色が和らいだ。
この病院には、何か怖いものでも居るのだろうか。

「おい？ウツセミ。この子でいいのか？」

僕は、声だけしか満足に存在感のないウツセミに話しかけた。

『うむ。この空間に迷い込んでるのは、この子だ』

「へえ、この子か」

僕は、その子供をまじまじと見た。
だいたい年のころ１０歳くらいだろうか。青と白のストライプ柄パジャマを着た、少年。
異様にやせぎすで、顔色も悪い。病院の入院患者だろうか。
だが、それ以上に印象的なのは、その少年の目だ。
生気がまるでない。
子供の目はきれいだ、ってよくいうけど、それは無垢だからではなく、「恐れを知らない」からだと思う。恐れを知らないから、子供は何物にも目を閉じたり背けたりしない。だから、目が輝いて見えるのだろう。
でも、この子はまるでヘドロのように濁った、毒々しい目をして

いる。

「ねえ、おじさん、ボクに何か用？」

少年は無表情な顔をして聞いてくる。まるで、「興味は無いけど社交辞令で聞きますよ」と言いたげな無表情さだ。

おじさん、と言われた僕は内心穏やかで無かったが、ここは抑えて本題を・・・・・

「おい、オレはおじさん、って歳じゃない。まだ２０歳だ！」

結局、年齢の訂正をしてしまう僕であった。

「ま、なんでもいいけどさ、お・じ・さ・ん！」

うあ～、なんだ、このガキャあ。失礼、つうか生意気。発言の最後の「おじさん」に悪意こもってたぞ。

「で、ボクになんの用なのさ」

あ、しまった。

子供に話の主導権を握られてる僕であった。

僕は、コホン、と咳払いをして、本題に入った。

「あ～、君を元の居場所に連れ戻しに来た」

「も、元の居場所？」

少年の無表情だった顔が、明らかに曇るのがわかった。

それに気づきつつも、僕は続ける。

「ああ。君は、ここにいちゃいけない。ここは、君の居場所じゃないんだ。・・・お兄さんもついていってやるから、さあ、いこう」

“お兄さん”に露骨なアクセントをつけ、僕は少年の座る長椅子に腰掛けた。

横に座る少年は、なぜかフルフルと震えている。

「そんなに震えて、お兄さんが怖いのか？それとも、ここが怖いのか？」

そう言うと少年は、明らかな悪意の目を僕に向けた。

この目も、子供のする目じゃないな。この子、苦労してんだな。

と、僕はふと思った。

「・・・・・違うよ」

少年が、不意につぶやいた。

「ん？何が？」

「おじさんが怖いんでも、ここが怖いんでもない。怖いのは・・・・・」

また、おじさんって言ったよ。カチンときたが、話を先に促す。

「ここから離れることさ」

少年は、吐き出すように言った。

ここ、って、ウツセミの家、この空間のことか？でも・・・・・・

「君の家は、この空間じゃない。さ、君の家に、帰ろう？」

僕がそう諭すと、少年は僕の襟元を掴んだ。十歳の少年とは、ましてやあんなガリガリの体から捻り出してるとは思えないほど強い力で。

そして少年は、僕のことをヘドロのような色の力のない目でにらみつけて、僕に向って怒鳴る。

「ふざけるな！僕の家は、病院なんだ！父さんや母さんの言う「家」は、僕に取っちゃ居場所でも何でもない！僕の居場所は、この病院なんだ！！」

少年は、僕の襟から手を離した。

泣いてはいなかった。だが、その瞳は、彼の心を如実に映し出していた。

え？この子、何を・・・・？

頭の中で少年の発言を反芻してる一瞬で、少年は長椅子から飛び降り、走り出した。

「あ、おい！」

少年はロビーをさっと抜け、廊下に入った。

『あ～～～～～！』

頭の中で響く美声。ウツセミだ。

「なんだよ、ウツセミ。うるさいぞ！！」

『たたたたたたた、大変だ、は、早くあの子供を・・・・・・』

ウツセミ、狼狽しているらしい。

「何が大変なんだ！？追いかけりゃあいいだろが！」

『あの子供が入っていった先は・・・・・・』

「先は？」

『ゴミ捨て場なんだ！！あそこは色んな空間のクズをまとめてあるところだ。だから、もし空間のクズに子供が入っちまったら・・・・・』

「・・・・・見つけるのに一苦労？」

『それどころではない！・・・・二度と見つからんかも知れん』

「な、何だと！」

僕は無我夢中で走り出した。ロビーの長椅子をハードル競争の要領で飛び越え、走りぬけ、件の廊下の前に立つ。

『おい、ここに入るつもりか！』

「あ、うん。そのつもり」

『言っただろう！ここは危険なんだ！』

「でもさ、ウツセミ。あの子を元の世界に返さないことには僕も帰れないんだろ？」

『・・・・・あ、ああ・・・』

「じゃあ、行くしかないじゃないか！」

僕は、廊下を駆け抜けた。

何で、あんな子供のために僕は頑張るんだ？確かに、あの子を助けないことには僕も帰れない。それは分かってる。

でも、なんでだろう。僕は、あの子を助けたいんだ。

正直成り行きで助けることになった少年だけど、なぜだろう、ほってはおけない。

なんだか、体中に力が湧いている。

僕は、助けるんだ。あの少年を。

【7】

ロビーから出ていた廊下を駆け抜けると、また周りの空間が変化した。

真っ暗な空間。その中で、キラキラ輝く砂のようなものが、ある一点を中心に渦を巻いている。

渦は丁度竜巻を横倒しにしたような構造で、渦の中心は、僕の目線の高さくらいにある。

昔、「北極星を中心とした星の運動」みたいな映像を見たことがあったが、丁度、あんな感じだ。

何が言いたいかというと、すごいキレイだ、ってことが言いたいんだけど、僕に語彙力がないのが悔やまれる。

『おい、あの中心には行くんじゃないぞ』

頭の中で、ウツセミの声が響く。あの中心って、あの渦の中心？

「なんで？」

『あそこは、「空間の墓場」だ。すべてのものを飲み込む。飲み込まれたが最後、二度と出られんぞ』

「あ、ああ・・・気をつけるよ」

ちょっとナーバスな心境になりながら、僕は光の渦がキレイな空

間をソロソロ歩く。
でも、なんだろう。この光る砂は・・・・ちょっと触っちゃおうかな・・・・。

『触るな！！』

「わわっ！！」

ウツセミの怒鳴り声に、僕は光る砂に向かって伸ばしていた手を引っ込めた。
僕は、口を尖らせてウツセミに言う。

「な、なんだよウツセミ、びっくりするじゃないか。」

『その砂みたいなものはな、空間たちの屑。それに触るとこの屑の中に吸い込まれて、閉じ込められるぞ！！』

「・・・・あ、マジで？」

光の砂をマジマジと眺める。
へえ、こんなキレイなものが、そんな危険なものとは。

でも、この光景、どこかで見覚えがあるぞ？
光の粒たちが、渦を巻いている。それを眺める、ちっちゃいボク。
ずっと前、どこかで・・・・
いつのことだったかな？思い出せないや。

僕はふと、渦の中心の方に目を向ける。キラキラ光る屑たちが集い、消える、キレイで恐ろしい渦の中心に。

目を向けた先には、渦を眺める少年の姿があった。
僕は、その少年に近づき、後ろに立った。

「キレイだな」

僕は少年に語りかけた。が、少年は答えない。
光の粒たちが少しずつ動き、少しずつ渦の中心に飲み込まれてゆく。
少年は、この光景に見惚(みと)れているようだ。

「・・・・・うん、きれいだ。」

少年が、やっと口を開いた。

「こういうの、見るの初めてか？」

「え？お兄さんは見たことあるの？」

少年は、僕の方に振り返り、無垢な顔をして聞いてくる。僕は、答えた。

「ああ。病院じゃなく、外の世界でね」

少年の顔が、また無表情な顔に変わった。

「お兄さんも、ボクに病院から出ろ、って言うの？居場所があるかないか分からないようなところへ？
確かに、外の世界は楽しいところかも知れない。でも、ボクには居場所がないもの。だから、ボクは病院から離れたくない！」

そうか、わかった。
少年のよくする無表情の意味が。あれは、悲しみを押し隠す表情なんだ。
ああいう風に、「ボクは悲しくないですよ」ってポーズを取らないと、悲しみに押しつぶされてしまう。そんな自分を守るための表情。

そういえば、僕もそういう子供だったな、と一人苦笑いする。

「何ニヤニヤしてるのさ！ねえ、ボクには外の世界に居場所があるの？！」

少年は、僕の足にしがみついた。

僕もそうだった。
入院していた頃、僕も、自分の居場所はどこにあるのか、考えていた。
そして、もしかして、自分には病院以外に居場所が無いんじゃないか、とも。

だから、今、僕の足にしがみつく少年の気持ちが痛いほどわかる。
だって、「ボク」もそうだったんだから。

だから、僕は無表情な顔をした少年を見据え、出来るだけ優しい声で、答えた。
僕が、僕なりに、病院から外の世界に出て、紡いだ答え。・・・
いや、あれ？誰かに諭されたんだっけ？まあいいか。

「外の世界に、君の居場所は無いよ。・・・・・・まだね。」

「まだ？」

僕は続ける。

「うん、まだ。

・・・・自分の居場所っていうのはね、用意してあるもんじゃない。常に自分でつくるものなんだ。」

「自分で・・・・つくる？」

「ああ。自分なりに考えて、努力して、人のために尽くして。そうやって自分の居場所をつくるんだ。」

「自分の居場所なんて・・・作れるの？」

少年は、不安そうな目をする。さっきまでの、生気の無かった目とは違う。「生きよう」とする力を秘めた、目。

もう、この子は大丈夫だ。僕は思った。だって、この子は生きようとしている。だから、不安な目をするんだ。もし、生きることを諦めた人間だったら、自分の人生を投げているから、この先のことを気にしたりはしない。僕は、内心胸をなでおろす。

その少年の目を、見つめて答える。

「ああ。だって、お兄さんだって、自分でつくったんだ、自分の居場所を」

「お兄さんも？」

「うん。僕も、君みたいだった。
僕も、外の世界に居場所があるのか、もしかしたら病院にしか居場所が無いのかもしれない、って考えてた。
でもね、外の世界に飛び出してみたら、みんながみんな、自分の居場所を見つけようと躍起なんだ。
それで、気づいたんだ、居場所は用意してあるものじゃない。探すものなんだ。
だから、君も自分の居場所を、探しに行こう？」

少年は、目に涙を溜めている。

「泣いてもいいぞ？今はお兄さんしかいないから」

『ま、ワシもばっちり見てるがな』

どうやら少年には、ウツセミの声は聞こえないらしい。
少年は、大粒の涙を流し始めた。

少年の涙は重力に従い下に落ち、光の渦たちに合流してゆく。
そして、渦の中心に飲み込まれ、消えていく。
ここにある、空間の屑とやらも、誰かの涙なのかな？と僕はなんとはなく思った。

僕は、両手に抱えたフルーツバスケットを下に置き、少年の頭をぐわしぐわしなでる。
少年は、心なしか嬉しそうに涙する。

少年が泣き止むと、僕は少年を連れ、光の粒たちが渦を巻く空間をあとにした。

【8】

「よくやったな。」

ロビーに戻ると、その真ん中にウツセミが立っていた。

「ねえ？あれ、何？」

涙で目を腫らせた少年が、僕に問いかける。僕は、答えた。

「この空間の、持ち主。ウツセミだよ」

「ウツセミ？」

少年は、ウツセミをじっと見ている。

そりゃそうだ。ワニの口に鷲の爪みたいな手、羊のような足で、燕尾服を着た怪物なんて、ここでしか見れたもんじゃない。

「そう、ウツセミ。」

僕は続けた。

「君の恩人。そして、おそらく・・・・」

僕の恩人。

ようやくすべてを思い出した。

今、僕の横にいる少年は、十年前、この空間に迷い込んだ僕自身だ。そして、この空間で僕らを引き合わせ、「ボク」を救い出してくれたのは。

今、僕らの目の前にいる、異形の生物。

「はっは、それは違うな。
お前を助けたのはワシではない。現在(いま)のお前が、十年前(むかし)のお前を助けたのだ。」

まるで、僕の気持ちを見透かしたかのように、ウツセミは言った。
ていうか、見透かしてるんだけど。
ウツセミは続ける。

「でもまあ、いい暇つぶしにはなった。楽しいかくれんぼだったよ」

それは嘘だよ。ウツセミ。

僕は、ウツセミが僕の心を見透かすのを見越した上で、心の中でつぶやく。

だって、君は。たったこれだけのかくれんぼで暇が潰せたのかい？
そもそも、僕と少年の「かくれんぼ」は、かくれんぼになってなかった。あれじゃあ、追いかけっこだよ。見てて面白かったか？
それに。
僕はもう、思い出してる。僕は、十年前、一週間もこの空間に迷い込んでない。迷い込んだのは、それこそ一晩の出来事だった。
なんでお前は、「子供がこの空間に一週間も迷い込んでる」って嘘をついたんだい？

「はっはっは」

ウツセミは、大口を開けて笑った。

「それもこれも、すべてはワシの暇つぶし。嘘も何も、全て暇つぶしを面白くするためのエッセンスに過ぎんのだよ。

その暇つぶしの結果、ワシはそれなりに楽しみ、一人の人が救われた。それだけのことだ」

・・・しゃ、釈然としないなあ。

「まあいいや。あ、そうだ。おい、坊主」

僕は、釈然としないウツセミの言い分を置いといて、僕の足にしがみつく少年に話しかける。ウツセミを警戒しているのか、少年はさっきからずっとそうしている。

「これ、やるよ」

僕は、手に持っていたフルーツバスケットを、少年に、つまり昔の僕に、差し出す。

「・・・え？いいの？」

少年はきれいな目を向けて僕に聞いてくる。

僕は、答えた。

「ああ。

これは、君への、お見舞いの品。

例え、君の事を待ってる人が誰もいなくても、僕だけは」

僕だけは。

「君の事を待ってる。そして信じてる。君が外の世界で、自分の居場所を見つけることができるって。」

少年は、無言で僕の差し出したフルーツバスケットを受け取る。

「さて。」

ウツセミは、少年の前に立った。そして、鷲の爪のような手で、少年の頭を文字通り鷲づかみにした。少年は、僕の顔を不安そうに見つめる。

「なにをする気なんだ？」

僕がそう聞くと、ウツセミはそんな僕を空いているほうの手で制した。

そして、ウツセミがなにごとかつぶやくと、ウツセミの手から光が漏れ出し、少年を包む。まぶしくはないが、暖かい、そんな光が。

多分、少年との別れのときなんだろう、僕は、直感的にそう思った。

「お兄ちゃん」

僕の横で、光に包まれ姿が薄くなっている少年が、僕を見つめる。

そして、僕に微笑みかけて、言った。

「ありがとう」

一瞬、ぱっと光ったかと思うと、少年の姿は完全に消えた。

「あの子、元の空間に帰ったのか」

僕は、ウツセミに問いかける。ウツセミは答えた。

「ああ。ワシの魔法で元の世界に送り返した。ついでに・・・」

「ついでに？」

僕は聞く。

「あの子の、ここでの記憶は消しておいた」

「え？消したの？！なんで？」

「ここのことは知られたくないもんでな」

「ってことは、僕の記憶も消すのかい？」

僕が苦笑いすると、ウツセミはそんな僕を笑い飛ばすかのように、豪快に笑った。

「お前は・・・別にいいよ消さんでも。

だって、お前はもう大人だから。大人は、自分の常識をゆるがす事態に直面したとき、自分なりに理屈をつけて納得しようとするだろう？

お前だって、ここから出れば、ここでの出来事を夢だと思うだろ

うよ。だがな・・・・」

ウツセミは続ける。

「その点、子供は怖い。見たものをそのまま理解するからな。だから、あの子の記憶を消したのだ。・・・ま、ワシの魔法が未熟なモンで、十年くらいでまた思い出すだろうけどな。」

僕はまた苦笑いをした。確かに思い出してる。

さて、と前置きすると、ウツセミは僕の頭を鷲掴みにする。

「お前を、元の世界へ送る。じゃあな。もう会う事はあるまいが」

そういうと、ウツセミは何事かをつぶやき始めた。あまり聞き取れない。日本語ではないのかも知れない。

詩の様に韻を踏んでいるように心地よく響く、不思議なつぶやきだ。

「さらばだ」

突然、僕の目を、一条の光が貫いた。

視界が、一気に真っ白になる。

真っ白で、何も見えない。でも、怖くは無い。

僕は帰るんだ。元の世界へ。

僕は帰るんだ。僕の居場所へ。

「ありがとう、ウツセミ」

僕がつぶやいた言葉が、彼に届いたのかはわからない。

【9】

「いやあ、昨日見舞いに来てくれるっていうから、首を長くして待ってたのにさ、結局来ないんだもん。昨日ほど孤独を味わった事は無かったよ～イヤ、マジで」

マサトは、僕の顔を恨めしそうな目で見る。僕は、そんなマサトに笑顔で返す。

「す、すまん。・・・昨日は突然用事が出来て・・・」

「なんだよ～。オレをほっぽいといて、用事って・・・さては、お前！！女か！！」

足を吊ってベッドに寝転がりながらも、意外に元気そうなマサトに安心しつつ、僕はため息を吐いた。

「あのなあ、僕がモテるように見えるか？」

「はは、ちげえねえ」

「笑うなよぉ！悲しくなるだろが！！」

「まあ、オレもお前と同じだけど。入院してこのかた、男しか見舞いに来ないよ・・・ショボーン」

マサトの病室は、場違いな笑い声に包まれた。

ウツセミの力でこの世界に送り返された僕は、気づいたら、病院のベッドの上にいた。

僕を見つけてくれた看護師さんによると、僕は病院の廊下の真ん中で倒れていたらしい。

点滴を2～3本打って、ようやく目を覚ましたらしい。

医者に、「もっとしっかりものを食べなさい」と言われたことから察するに、僕はどうやら軽い栄養失調だったのだろう。

でも、僕は結構大食漢なんだけど・・・・？

なんにせよ、点滴を打っただけで入院はまぬがれた。

やはり、あの空間にいたせいなのだろうか。人知を超えた空間。

そこでは、なにがあっても不思議じゃない。

「に、してもさ」

そうつぶやいて、マサトは窓の方を見る。つられて外の風景を見ると、光に溢れた病院の庭が広がっている。

マサトは視線を元の位置に返してつぶやく。

「あんな、バカなことするんじゃなかったよ。」

「ああ、あのダイブのこと？」

僕は、溢れそうになる笑いを抑えて聞く。が、マサトはそんな僕とは対照的に、ひたすらに真面目な顔をした。

「ああ。そうさ。

初のワンマンライブで浮かれてたのかもなあ。ていうか、自惚れてたよ。」

マサトは、自嘲気味につぶやいた。さらに言葉を続ける。

「・・・お前にだから話すけどさ、オレ、大学卒業したら、プロのバンドマンになりたいんだ。」

知らなかった。マサトが、楽器で身を立てようとしてたなんて。

「でも、それとダイブが、なんの関係があるのさ？」

僕は聞いた。今度はマジメに。真面目な調子のマサトを見据えて。マサトは答える。

「自分の、立ってる位置を試したくなったんだ。自分は今、バンドマンとして、どの位の位置にいるんだろう、って思って。だから、ダイブしてみた。・・・一人くらいは受け止めてくれるかな、って期待はあった。だから飛んだ。でも、結果はあの様だった。

・・・はは、ダメだな、オレ。才能ねえのかな・・・」

マサトは、無表情。だが、それは何も考えてないからじゃなく、その顔を取ってなければ感情があふれ出してしまうからだろう。

違う。

マサト、違うよ。それは。

僕は、自分の思いをそのまま口にした。

「違うよ、マサト。」

「何がだよ」

マサトは力なくつぶやいた。僕は力をこめてマサトに語りかける。

「“バンドマン”としての位置なんて、ダイブなんかで決まるもんじゃない。それに・・・」

「それに？」

「頑張って作ればいいんだよ。バンドマンとしての位置をさ。自分の力でね。

世間のやつらに振り向いてもらうんじゃなく、自分の力で、世間のやつらを振り向かそうよ」

「そうだな」マサトは、窓の外を見遣っている。

「僕も、手伝うからさ」

僕がそう言うと、マサトは急に顔をこっちに向けた。

「いま？なんて？」

「だから、僕も手伝うよ。大学にいる間は暇だからね。暇つぶしにはなるよ」

「へへ・・・」

マサトは、目を腕でガシガシこすってこう言った。

「暇つぶしでもいいよ。・・・・ありがとう、元気になったわ」

「おう、ま、とにかくだ、お前の退院を待ってるよ。戻ってきたら、また、ワンマンライブやって、ダイブに挑戦しようぜ」

「はは、バカ言え。」

マサトは続けた。

「ダイブは二度とゴメンだ」

僕らは共に顔を見合わせ、はははは、と豪快に笑った。

・・・僕は、今、居場所がしっかりあるぞ。

お前はどうなんだ？少年？

がんばれよ、十年前の、僕。

笑い声に包まれたマサトの一人病室のなかで、十年前に一人悩んでいた少年の事を想った。

窓の外は、僕の、マサトの、そしてあの少年の前途を祝福するように、光に満ち溢れていた。

【10】完結

珍しいことがあるもんだ。

昨日、ボクに見舞い客が来たらしい。
らしい、ってわざわざ断るのは、ボクは見舞い客に会ってないからだ。
どうやら、ボクが寝てる間に、その見舞い客はボクの寝てる枕元にフルーツバスケットを置いてったようだ。

でも、どう考えてもおかしいよなあ。
だって、昨日は面会時間ぎりぎりまで母さんがいたんだから、そのあとにだれかが面会に来るはずもない。
それに、そもそもボクを見舞う人間など、いようはずもない。

そもそも、母さんが帰ったあとの記憶がはっきりしない。
いつもだと、ロビーに忍び込んで遊ぶはずなんだけど・・・・そこらへんからの記憶が無い。
昨日は、一体何をしてたんだろ？

枕元近くの台の上においてある、件のフルーツバスケットを眺めながら昨日のことについてウンウンと唸って考える。
う～む、わからない・・・・・。

でも、わからなくちゃ困るんだ。だって・・・・

「ねえ、こんな立派なフルーツバスケット、誰から貰ったの？」

そう、母さんがうるさいんだ。

どうやら、フルーツバスケットの贈り主にお礼をしなくちゃなんないらしい。

大変だな、大人ってやつは。

「知らないよ。僕だって、気づいたのは今さっきなんだから」

そう反論するボクをよそに、母さんはフルーツバスケットをごそごそとまさぐっている。

「何してんの？母さん？」

「え？もしかしたら贈り主の手がかりがあるかもしれないでしょ？」

母さんはそう言って、フルーツバスケットの底をごそごそとやっている。

・・・・手がかりって・・・・推理ドラマか何か？

そう母さんに突っ込みたいボクだったけど、あえて言わないことにした。

「あ、何これ！」

母さんは何かを見つけ出したらしい。母さんは手をバスケットから引き抜くと、その見つけ出したものをボクの目の前にかざす。

母さんの手には、厚紙のようなものが握られている。

「何、これ？」

ボクがそう聞くと、母さんは満面の笑顔で答える。

「これはね、宛名書きよ！要は、贈り主さんの名前と、宛名、つまりあなたの名前が書いてある紙よ！

・・・・ええっと・・・・どれどれ・・・？」

母さんはその宛名書きに目を通し始めた。すると、母さんは首をかしげた。

「おかしいわね？」

「何が？」

「贈り主が、あなたの名前になってる・・・それに宛名が「マサト」？お母さん、「マサト」なんて知り合いいないわよ？」

母さんは首をかしげる。

ボクにも見せて、と言うと、母さんはボクに、宛名書きを手渡した。

確かに、「マサト様江」と書いてある。その横には僕の名前。

贈り主と宛名を間違えたのかな？おっちょこちょいな人だなあ。

そんなことを考えながら、宛名書きを読み進めた。

すると、ボクの名前の下に太い字で、

「お前の退院を、待ってるよ」と、書いてあるのを見つけた。

え？　ボクを、待ってる人がいるの？外の世界で？
なんだか、心のモヤモヤが晴れていく気分だ。
いつもだったら、こんな一言で心は動かないのに。どうしてだろう。

「母さん」

「なあに？誰か分かった？マサトさん。」

なんだか、力が湧いてくるような気分。

「ボク、手術受けるよ」

母さんは、一瞬驚いたような顔をしたけど、すぐ、満面の笑顔に戻った。
そして、ベッドに座るボクを、強く抱きしめた。

なんだろう、ボク、力が湧いてくるような気持ちがするんだ。
いや、外の世界で、ボクのことを待っててくれる人がいる。それが分かっただけで、「居場所がうんぬん」なんて、どうでも良くなっちゃったんだ。

ボクは、強い力で抱きしめ続ける母さんを引き剥がし、窓の外を見る。

病院の庭が、光に包まれて、その輪郭を失っている。

ボク、頑張るよ。お兄ちゃん。

あれ？

お兄ちゃんって、だれだっけ？思い出せない・・・・

そんなボクの疑問をよそに、窓の外は、まるでボクの選択を祝福してくれてるかのように、強い、それでいて優しい光に溢れていた。

【10】完結（後書き）

如何でしたか？
感想や批評など、お待ちしております。
やっぱり、人の評価が気になるんです（笑）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0864c/

曖昧見舞

2010年10月21日20時45分発行